

ヨルといふ助動詞

橘

正

一

— ヨ ル と い ふ 助 動 詞 —

「雪が降りよる」といへば、現在降雪中であることを意味し、「雪が降つとる」といへば、雪はもう止んで其處に積つて居るといふ意味である。「來よる」といへば、現在街道を歩行中であり、「來とる」といへば、訪問先に行著いて、座敷に上つて話をして居る。ヨルは進行態（繼續態）であり、トルは存在態である。——かういふ事は早くから聞いて居た。しかし、今調べてみると、それほど單純でもない様だ、無論、さういふ地方もあるが、又、さうでない地方もある。

そこで先づ、ヨルの分布を調べてみる。これは一口に西日本と言つてよい。飛騨・美濃・尾張が東の限だらう。

福井縣にもある。近畿地方は全部、中國も全部、四國も全部、九州も全部と言ひたいが、鹿児島縣からは、今の所、發見されない。

ヨルの活用は、居るの活用と同じく、ラ行四段である、宇和島市を例に取ると、ヨラ、ヨリ、ヨル、ヨル、ヨリ、

1、ヨレと活用する。

雨は降りよらん

飛行機が飛びよります

次郎は寝よる

來よる人、誰そ

話をしより、あ（らあ）叱られる

本でも読みよれ

先へ行きよろう (行つて居よう)

飛騨吉城郡には奇妙な言ひ方がある。見ヨッタ (見つた) 登リヨッタ (登りつつ、登りながら) 起キヨラン (打消) 来ヨラナング (過去の打消) はよいとして、来ヨゴザル (来つつある) 行キヨデル、行キヨウデル (行きつつある、敬語) 等は不思議である。

ヨルにも若干の訛はある。ヨール (飛騨・美濃・大和吉野郡・因幡・石見・山陽道・香川・愛媛) ニール (備中) ユー (土佐) ヨン (大分) ヨー (佐賀) 等。ただしヲル (和歌山・播磨・大阪府・隠岐・石見・山口) ヲル (佐賀) は、ヨルの訛ではなく、その原形である。

ヨルは上の言葉の母音と熟して拗音になる場合が多い。作リョル、聞キョッタ等。ヨルの一つ置いて上に、不思議に促音を入れる地方が多い。咲キヨル (大和) 行キヨル (大和・三重尾鷲町・大阪府・播磨・香川) といふ風に。欲シカリョル (三重尾鷲町) 降リリョッタ (淡路) 這入リョル (高松市) 蹴リョル (伊豫弓削島) 等は、他縣の人に取つては發音の困難な音である。この困難を免れるために、鼻音を代用する所もある。蹴ンリョル (香川縣粟島) 降ンリョル (徳島) 死ンニョッタ (大和・徳

島) インニョル (大和・香川) インニョル (和泉) シンギョル (大和) 等。大阪府では、訛つて、投ンゴル (投ぐ) 背キョッタ (書いてゐた) 行キョッタ (行き居つた) 等といふ。行キョッタは大和や近江にもある。

ヨルの意味は所によつて違ふ。進行態の意味の濃い所あり、薄い所あり、その意味の全く無い所もある。佐伯降治さんによれば、岡山縣のヨウルには進行形の意味が明であるといふ。

現在 降る、降つとる、降つて居る

過去 降つた、降つてゐた

未來 降らう、降るぢやらう

現在進行形 降りよう

過去進行形 降りようた

未來進行形 降りようらう (降りようるぢやらう)

しかし、今村勝彦さんの「御津郡昔話」を見ると、必ずしもさうではない代である。

△おあから、あんまり意地悪うしよと。ちいにはやア、人が憎むぞ (昔話研究、一ノ六)

△向ふを見ると、澤山の俣式旗を立て、俣式が通りよらうた。向は、………刺出すのは後起が悪いから、

夜晩う出しよんちあらう、と思ひ思ひ見てゐると(昔話研究、一ノ六)

△とうとう比久尾になつてしまふて、何處や彼處、つまり諸國を廻りようたんでがアす(昔話研究、一ノ八)

これを「あまり意地悪くしつつかあると遂には人が憎むぞ」などと譯したら、變なものである。さうかと思ふと、トルを進行形に使つたのもある。

ヨルの發生地は、現在の分布から見ても、京阪である事は間違ひないと思ふが、その京阪では、もう、進行形の意義を失つて、あまつさへ、人を卑しめた言ひ方に成り下つて居る。谷崎潤一郎氏の方言文學記註には、ヨルがたゞた一個所あるが、それは「こゝで死んだら、ふん、あの男、不臭者や云ふこと悲觀して死によつた云はれるのん口掛しい」で、罵稱である。「居あがるをキヨルと譯した人もある。しかし、それは大阪市の事で、大阪府下では必ずしもさうではない。泉北郡のインキヨルを歸りつゝある」と譯した人さへある。それ程でなくても、シヨルは「爲て居る」、ミヨルは「見て居る」といふ意味は和泉あたりには、今も残つてゐる。東成郡平野郷町ではイキヤンヨラン(行かない)等と使つて、進行態どころ

か、存在態の意味すらも失つてしまつた。即ち、シヨランはセンと同じ意味である。同様にして、キヨルは「居る」、行キヨクタは「行つた」の意味に外ならない。かくして、同じ大阪府の同じ言ひ方「しよる」にも「して居る」「する」「しあがる」等、色々の意味がある事が判る。變化は先づ大都會に起り、次いで四州に傳はるとすれば、罵稱は最後の、従つて最近の變化であらう。大阪府には「言うてよつた」「言つてゐた」といふ珍しい言ひ方もある。ヨルを腹稱に使ふ所は、大阪市ばかりではない、近江や京都市や奈良市もさうである。

持つて行きよる(持つて行きやがる) 京都市

猫のシノコロ(床下)へ這入りよつた。奈良市

あいつ面倒臭い事を言ひよる。奈良市

「覚えよらへん」「覚えなない」「返しよらへん」「返しません」等の例を見ても、奈良市のヨルには進行形の意味が無い事は明である。ただし、吉野郡のヨウルには「て居る」といふ意味はある。行キヨクタ(吉野川沿岸)イッコク(高市郡)を「行つてしまつた」と譯した人があるが、この解釋は當れりや否やを知らない。三重尾鷲町のイキヨルを「行きつゝある」と解釋した人がある。所が同じ人が同じ町のイヒヨクタを「言つておいた」と解釋し

たのは可笑しい。これは誤譯だらう。又「誰も彼もさう言ひました(け)」を「ソウ言ヒヨ、タナア」と譯した、ヨッタを過去の追想に使ふ所は他にもあるから、是はこれによからう。

和歌山縣には、ヨル、ヤル、アル、オルといふ似寄つた言ひ方が並び行はれて居る。この間に區別ありや無しや不明である。語源的には、ヨルはラルの訛、ヤルはアルの訛であるが、同縣では、ヨルとアルとを屢々混同して使ふのである。イキアル(行きつつある)イキオッタ(歩いて行つた)イキオル(行きあがる)ユイヤル(言つてゐる)イキヤル(行きつつある)ミヤル(見てゐる)シヨル(する)キヨル(來つつある)イキヨッタ(行つた)シヨッタ(してゐた)——これらの不用意な對譯から文法的意義を引出す事は不可能に近い。ただ、御坊町のオルには既に罵言の意が含まれてゐる事だけ注意しておく。

滋賀縣は京都市に近く、交通も便利な所だから、京都市に起つた變化が、逸早く傳はるのは自然である。ヨルに、進行態の意は幾ほども無く、存在態の意すらも忘れられてゐる。イヨル(居る)イキヨル(行く)イソヨル(行く)マケヨッタ(負けた)等を、それごとく、單純の現在

や過去に譯してゐるのは、けだし、彼の地の眞を傳へるものであらう。それのみか、イキヨル(行きあがる)といふ罵稱さへも愛知郡にはある。

兵庫縣では但馬と淡路が古風である。但馬で「雪が降りよる」と言へば、現在その事が行はれつつある事を意味する。「雪が降つとる」の方は、完了の氣持がやや濃く存在態にも用ひられる。淡路も同様である。搦磨は色々である。「昨日親成へ行。きよると途中で自動車の衝突があつてナア」等は進行態であり、「草履が破れよつてだす」は存在態であり、「庚申の日は、百姓家でも昔は戸をしめて業を休みよつた。庭は草履をはいて行。きよた」は過去の習慣の回想である。ここにはラルもある。「旦那濱へ行きをつた」。

美濃には進行形の意味がかなり濃く残つてゐる。郡上那古話(昔話研究、二卷六號)の例を左に示す。

△婆さんが麻の芋をたぐつてゐるし、娘は芋をうみよるげな

△夜遊びに行つて、早う歸つて來ようと思つたら、宿屋の旦那が木に生きた人をさかさまに吊るけて生血を飲みよつた。

△段々来よつたら山道になつた處で日が暮れてもう歩けんやうになつた。

飛騨も大體同様である。大野郡の語法で、「死にようる」といへば、「死なうとして居る」であり、「今起きようる」といへば、「今起きかかつて居る」である。名古屋にも似た語法がある。「あの人の前でウツカリ云ひよつた」は「云ふ所だつた」の意であり、「まあちよこつと早よ來や、聞きヨ、たに」は「聞くのだつたに」の意である。又、「聞いとり」た「獨とり」たといふ珍しい言ひ方もあつて、過去進行態、また過去の經驗を表す。福井市では「あいつ、足半穿きよつた」の例で見ると、どうやら、階梯であるらしい。

因幡ではヨウルといふ「何し、るだい」(何をして居るか)「服吸ようてつかんせえ」(服吸つて下さい)元氣を出して行きようると、田圃の中で、バタ／＼騒いでゐるもんがある」等。

隠岐ではヨルの使用は稀である。ただ、過去の習慣を表すのにヨ、タテ使ふ。

△浦々は浪人てつて、悪い事した者が流さえて隠岐の國へ來ちよ居りよつたに、村に此の浪人が一人二

人居らんとか無かりよつた。

かういふ風に、形容動詞に續く所は全国的にも珍しい。ただし、岡山縣には例がある。石見では、動作の進行を表す外に「もう少しで遅刻しよつた」等と「何々せんとした」の意味にも使ふ。ヨルは出雲にも少しある。

岡山縣については先に述べた。吉備郡ではミユル(見て居る)といふ。見うる(御津郡)と書いたのも、實際の發音は拗音ミユルかとも思はれる。備後府中町にも見ユルがある。事の進行を表はすと説明した人があつたが、廣島市の人に「賣つてゐないから、借りる外化方があるまい」を譯させた所「賣りヨラン」とも「賣ットラン」とも譯したから、ほとんど區別は無いらしい。「此頃は雨ばかり降つてゐたのに、今日は晴れたから人出が多いだらう」の解釋も「降りヨッタ」「降、ト、タ」の兩方ある。隣の山口縣も同様であるが、ここでは「降、降、チ、リヨ、タ」といふ奇妙な重複した言ひ方がある。直譯すれば「降つて居り居つた」となる。宇野千代さんの小説「よしや逆さに」は、堺家は廣島縣とあるが、方言は周防らしい。それに、

△あは、あは、あは、あんな外道奴、この小娘に欺されて逃げよつたのぢやな

△いんま先、何處ぞの男と一緒にお行きよつたか  
とある。前者は卑稱の如く、後者は敬稱の如く見える。

黒島傳治氏の小説「秋の洪水」は小豆島の方言を使つたと認められる。これにはヨルの使用が多い。「信吉、牛

鐘が鳴りよるがこれなどは進行形と認めてもよいが、しかし、一般には、ヨルとトルとは殆ど區別が無い様である

△小作をしたつて、地子を納めよつたら、取りどころはないせに、四反作つとつて、家に食ふだけの麥が

とれんのちやが  
△己等が見たつて、村會議員が自分勝手なことをしよるの分りきつとるちやが

ヨルは現在の習慣、ヨ、タは過去の習慣を表す場合がある

△お父方は昔から飲みよるんが、一合餘けえ飲んだつて控へる事はしやせずよ

△家で寝て醬油屋へ働きに行きよるんちやが、飲み助でどうもならんのちや

△一人ある親の善助爺さんは、百姓日傭をして食ひよるんちや

△信吉が小田さんで働きよつた時分によ  
宇和島市では、ヨルとトルの使ひ分けは鮮かである。

即ち「彼は來よる」といへば、來つたある、まだ來ては居ない事であり「彼は來とる」といへば、來て此處に居る事である。又、「自分は轉ぼうとしたを」俺アこけよつた」ともいふ。阿波美馬郡にも「も少しで死んによつた」といふ言ひ方である。土佐幡多郡の用例は次の様なものである。「兄、病氣シナ、テ、寝ヨル。弟、毬蹴リヨル」。今起キ、トシヨルトコヂヤ。佐川町の用例は、「何處へおいでよりますぞ」。「家へいによる」等。

最後に九州。博多仁和加に次の用例がある。

△人の話では、吉藏は此頃藝者狂しよるげナバイ

これは現在の習慣を表すと見たは儼口か。

△私が入院しとる事ばもう知つとつたやアなア、心配しよろう

これで見ると、トルとヨルとの間には、やはり、差別があるらしい。その外、ヨルは大分、宮崎、佐賀、長崎、熊本の諸縣にあり、いづれも進行形と報告されて居る。

要するに、シヨルには、「しつつかある」「してゐる」「する」「しあがる」「しようとして居る」「するのを常とする」等色々の意味があり、所により、時により、違つて居るから、進行態とばかりは決められないのである。

(昭十一、十一、廿三)